奥島教育長コラム　№44　2026．11．1

〇○○もんずら



それでも言葉を

コンポレーションガバナンス改革、ドパガキ、コンテンツ、オワコン、アドバンスト・エッセンシャルワーカー、〇〇で滅（めっ）！・・・何のこと？**ダサい**・・これは何となくかな。

テレビやラジオから聞こえてくる言葉が、さっぱりわからないことがあります。音として届いてもわからず、文字にして送られてもわからない、そんな言葉があふれています。辞書で調べたり、インターネットで検索したり、でもそこにも言葉がいっぱいで、理解できないことが多いです。だからと言って、話すのも聞くのも、読むのも書くのも言葉。あぁー言葉って面倒くさいなあと思うことも。でも言葉がなければ、このコラムは書けないのです。平成時代に入って間もなくの頃、こんな言葉に出会いました。

『人間というものは、言葉で自分を教育していく。言葉で世界をわかっていく。言葉で他の人と気持ちや考えを伝え合うことで生きている。　西郷竹彦（児童文学研究者）』

困った時、この言葉に力をもらってきました。**みなさんは、言葉好きですか？**



言わないでおくために

垣内磯子

言いすぎるために
ことばは
あるのではなく
言わないでおくために
あるのではないか
と電話を切って
思う
恋がいちばんうつくしいのも
うちあける前のひととき
ことばを
こころにしまっているとき

『それぞれの答』

私は、現代人が失いかけているのは「話しあい」などではなくて、むしろ「黙りあい」だと思っている。

本当の沈黙のない時代に、本当の話し合いだけが成立する訳がないではないか。

大きなコミュニケーションが発達し、週刊誌やテレビのメディアがふくれあがるほど、沈黙は死んでゆく。

そして、「黙っていることに耐えられない」人たちがどんどんふえてゆくのである。

だが、黙っていることを忘れてしまった人たちが、本当の「話しあい」を思い出すことはないであろう。

彼らはつぎつぎと話相手をかえては、より深いコミュニケーションを求めて裏切られてゆく。

そして、沈黙も饒舌も失ってスピーキングマシンのように「話しかけること」と「生きること」とを混同しながら年老いてゆくのである。

寺山修司『歴史の上のサーカス』